



第1回 伊丹市 未来デザインワークショップの記録

伊丹市ブランドコンセプト策定プロジェクト
～みんなの声で紡ぎ描く、伊丹の未来デザイン～

7月12日
デザインワークショップ

「伊丹の魅力ってなんだろう？」

「私たちのまちには、どんな課題があるのだろう？」

伊丹市がこれから歩むべき未来の指針、
「ブランドコンセプト」づくりが
いよいよ始まりました。

中学生からあらゆる世代の市民、
地元企業・団体の皆さん、そして市職員まで、
総勢54名（参加者52名、オブザーバー2名）が
きららホールに一堂に会しました。





年代も立場もバラバラな参加者が、
10のテーブルを囲み、
本音で伊丹のリアルと
未来を語り尽くす
熱気を帯びた3時間半
となりました。



伊丹に生きるみんなのことを考える時間。
世代を超えた対話から、
新たな気づきが生まれました。

「こんなこと言ってもいいのかな？」
「思ったことをそのまま書いていいのかな？」

そんな不安も、自己紹介や
「伊丹市をキャラクターに例えると？」
について語り合ううちに吹き飛びました。

『全員がフラットに発言する』
というみんなのルールのもと、
気がつけば、心のままに発言し、
お互いの意見に深くうなずき
互いに共感し合う
参加者の姿がありました。



伊丹市が持つポテンシャル、資源や歴史とは何か。そして、そこに住まう伊丹市民の姿とは？
ワークショップでの様々な「問い」を通じて、伊丹というまちを多角的に見つめ直し、
議論することで、ふだんの暮らしの中では見えないことも見えてくる。

4つのワーク

【ワーク1】伊丹市の課題は何か？

【ワーク2】伊丹市のらしさ・価値観・強みは何か？

【ワーク3】未来に持っていきたいBEST3は？

【ワーク4】伊丹市が世界一になれることは何か？

【ワーク1】まずは包み隠さず「伊丹の課題」を出し切る

より良い未来を描くためには、「今の伊丹の課題」に向き合わなければなりません。

付箋を書き始めるとペンが止まらない。「わかる！」「それな！」という共感の笑い声。

「自分たちのまちだからこそ歯がゆさ」を楽しめること自体が、市民の伊丹愛の強さかもしれません。



●通過点になっている

「空港や酒蔵のイメージはあるけれど、宿泊施設が少なく、素通りされてしまう『通過点』になっている」

●交通の偏りとインフラ

「交通利便性の地域格差がある。電車・バス路線の網羅ができていない」

●知名度が低い・特徴がない

「地味で目立たず、大阪府だと勘違いされることすらある。良くも悪くも普通で、『突き抜けたもの』がない」

●遊び場・若者の居場所の不足

「ボール遊びができない。公園の遊具が少ない。」

【ワーク2 & 3】視点を変えれば魅力になる。「伊丹らしさ」の再発見

課題に向き合ったあとは、「未来に持っていきたい伊丹のらしさや強み」を探ります。
すると、あたりまえだと思っていたことが伊丹特有の「らしさ」であることに気づきました。



●最高の住みやすさ(ちょうどいい)

「なんでも揃うコンパクトさ」や「平坦でどこへでも自転車で行ける環境」、「イオンが2つもある贅沢」。気取らない「ちょうどよさ」こそが日常の大きな価値

●人の温かさ、市民力

「いい意味でお節介な人々のつながり」。行政任せではなく、市民自身が主体となって盛り上げる「バル」や「グリーンジャム」などのイベント力

●日常に息づく歴史・自然・子育ての安心

「清酒発祥の地」という誇れる歴史。昆陽池公園などの豊かな自然が日常に溶け込むまち。さらに子どもの医療費無料など、日々に安心感があるからこそ、愛着が湧いてくる

【ワーク4】伊丹が「世界一」になれることは何か？

伊丹の「らしさ」や「強み」をもっと大きく…。

伊丹が『世界一』になれることって何だろう？

この夢広がる問いに対して、導き出された答えは、
とても伊丹らしく、温もりある未来像ばかりでした。

●世界一居心地の良い「ちょうどよさ」「住みやすさ」
都会と田舎のいいところ取り。誰かに見栄を張る必要もなく、
自分のペースで心地よく過ごせるまち

●世界一の「地域愛」と「市民力」
地域への愛着を原動力に誰かに頼るのではなく、自分たちでまちを良くしようと動く。困っている人を放っておかない、世代を超えたつながり

●世界一「歴史と文化」が息づくまち
清酒発祥に端を発する伊丹独自の町民文化や俳諧文化は
現在の市民性にも影響を与えている。



壁に貼り巡らされた付箋、熱のこもった発表の数々。
そこには、伊丹への少し辛口な本音と、それを大きく上回る
ほどの深い「伊丹愛」が詰まっていました。
この「伊丹愛」が、ブランドの種に変わり、
その思いがどんなコンセプトという実になるのか。
そして、そのコンセプトが伊丹の未来をどう動かしていくのか。
これからの伊丹市の新しい挑戦に、どうぞご期待ください。



中田市長コメント

皆さん、長時間のワークお疲れ様でした。全てのお話を聞かせていただき、私自身も大きな気づきがありました。これまで伊丹の良さについて考え続けてきましたが、皆さんのご意見から主に2つの重要な視点を得ることができました。

一つ目は、「比較対象の視点」です。我々行政は、どうしても行政区域の中で考え、兵庫県内や神戸市を比較対象としがちです。しかし、皆さんの口からは神戸の話はほとんど出ず、大阪との比較が語られました。「大阪府伊丹市」と呼ばれるような、実際に住んでいらっしゃる皆様の視点を改めて持つことで、伊丹のブランドや街のあり方を考えていかなければならないと気づかされました。

二つ目は、オランダの街との比較といった「国際的な視点」。個人的な話になりますが、私の娘がオランダへ短期留学した際、騒がしいニューヨークよりも、オランダの落ち着いた街並みを非常に気に入りました。これと同じように、伊丹で育った人たちは、伊丹の持つ落ち着いた雰囲気と潜在意識レベルで親和性や愛着を持っているのだと思います。これがブランドに繋がる一筋の光明になると見出させてもらいました。

本日は長丁場で、頭もフル回転され大変お疲れかと思いますが、私や職員一人一人にとっても非常に気づきのある機会となりました。いただいた意見の重なる要素をしっかりと抽出し、伊丹の良さへと繋げていきたいというのが私の所感です。非常にありがたいヒントをいただき、本当にありがとうございました。

